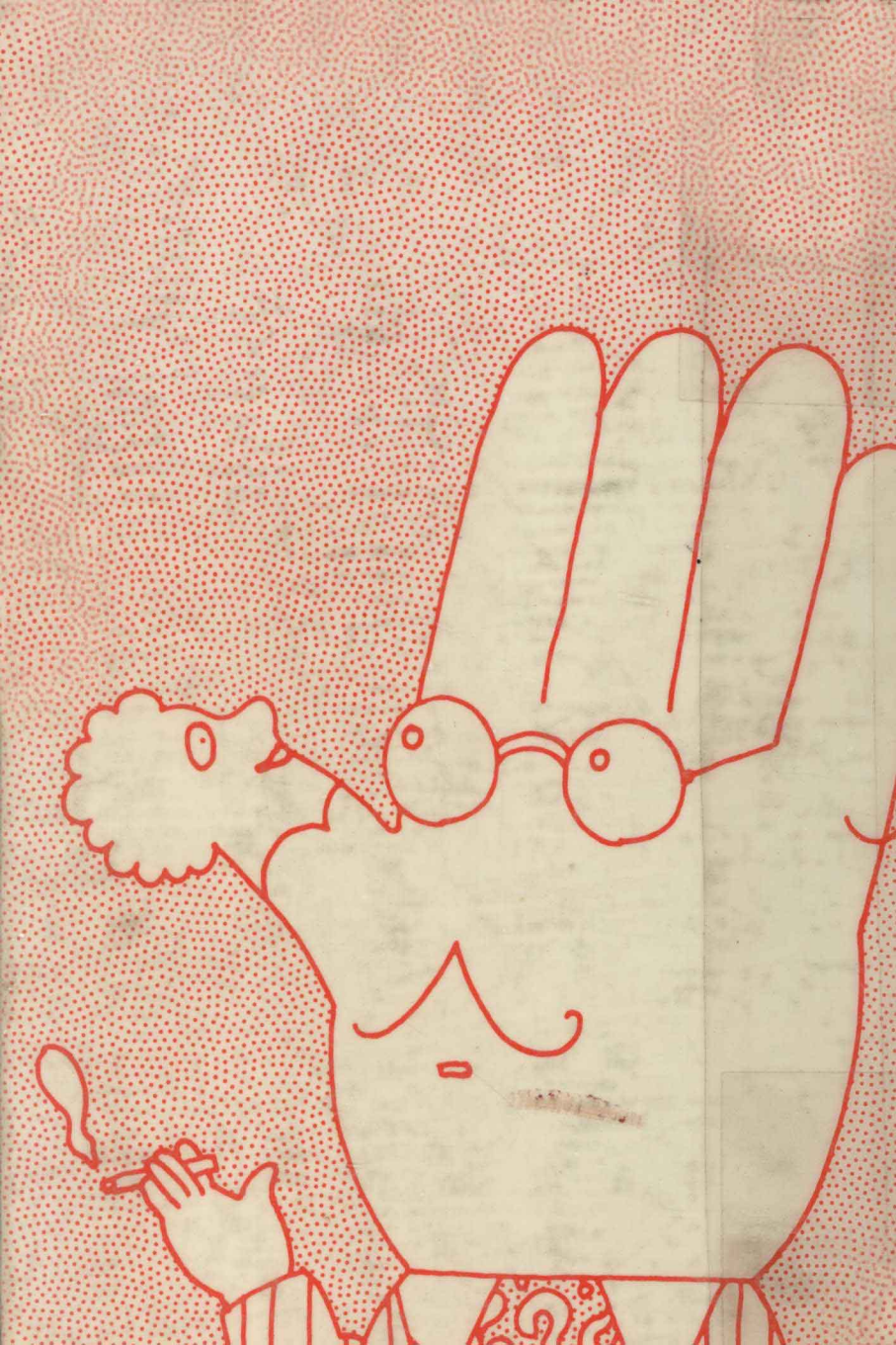
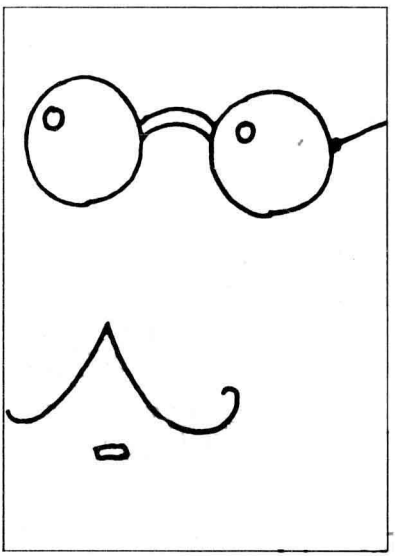


遠藤周作

第二ユーモア小説集



遠藤周作第二ユーモア小説集

昭和48年11月24日　第1刷発行

著　者　遠藤周作
発行者　野間省一
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2—12—21　郵便番号 112
電話東京(03)945—1111(大代表)　振替東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社

定価 680 円

©遠藤周作　1973

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)　Printed in Japan

0093-126849-2253 (0)　(文1)

目

次

男と女……7
第一話　奇襲戦法……9
第二話　可愛い女房……38
第三話　こんな男でも結婚できる……67
大坂の陣異聞……97
娘たちはこわい……123
世は戦国時代……145
女を捨てるのはむつかしい……173

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

青い帽子の女……199
花鳥風月を友として……221
悪魔……245
外人に手を出すな……277
競馬場の女……301
幻の女……329
枯れた枝……355

装　幀　前野洋一
イラスト　まえの・まり

遠藤周作第二ユーモア小説集

男と女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一話　奇襲戦法

娘というものは誰でもいつか愛しているといわれる日の来るのを待っているものだが、誰にでも心を許すわけでない。だから外見見ばえのする顔だちではない青年は色々と秘策をねらねばならぬ。今から書く挿話はそうした現代の頭のいい醜男がかなりの美人を細君にした話である。本当にあった話で、私が後に彼の妻となった女性から直接きいたものだが、本名をそのまま使うわけにはいかない。名前だけは一応、仮名にしておいた。

甲府の短大を卒えた今井フサ子はすぐ東京に出て日本橋にある広告会社に入社したのだが、事務室で与えられた席の隣には一年前にここに就職した藤堂という見ばえのしない青年が坐っていた。顔が野球のホームベースのように四角くて肩もエモンかけのように張った彼は、どこか漫画の登場人物によく似ていて、フサ子の胸をときめかすようなものは、何一つとしてなかった。

「よろしくお願いします」
はじめてその席についた時、フサ子が形式的に先輩の彼に頭をさげると、そのホームベースのような顔をこちらにむけて、
「美人だなあ」
と言った。フサ子はこの人とは仕事以外に口はきくまいとその時思った。
だが、その藤堂と仕事以外のことで口をきいたのは入社して三日目だった。
ちょうど昼の時間で彼女が下宿からもってきたお弁当をだして食べはじめていると、外出先から戻ってきた藤堂は自分の茶碗でお茶を飲みながら、横眼でジロジロとフサ子の弁当を眺め、
「おいしそうですなあ」
と心底、うらやましそうな声でつぶやいた。
「まあ」
フサ子が思わず赤くなると、
「たべたいなあ。そんな弁当」
お世辞とも本気ともつかぬ調子でじっとこちらの顔を凝視している。フサ子はたまりかねて、
「少し、あげましょうか」

と言うと、藤堂はすぐに自分の引出しをあけて箸箱をだし、
「おねがいします。その蓋にとってください。あっ、その卵焼きも。もう一きれ」
とこちらの意志を無視して弁当箱の御飯とおかずを半分も奪い、
「ふむ。おいしいですね。ふむ、うまい」
またたく間に平らげてしまったのだった。
その時は自分の手づくりのお弁当をそんなに悦んでくれたのが満更わるい気持でもなかったが、翌日も昼の時間になると、箸箱だけを出してじっとこちらの顔を見ているのに気がつくと、フサ子は少し驚かざるをえなかった。そして今度も、お弁当を半分たべられてしまった。
三日目、四日目と同じ破目にあってフサ子は嫌になってきた。この人はそう言えば昼食時間、何も持ってこないようである。他の社員のように店屋ものをとったり、外に食事にいくわけではない。わたしの弁当を当てにしているようだと気がついた。
「ねえ」
四日目の退社時間、彼女が手洗所に行くと上田信子という先輩の女子社員が彼女に忠告してくれた。
「こんなこと、言いたくないけれど、あなた、藤堂さんにお弁当たべられたんじゃない？」
「えっ」
「やっぱり、そうか。やめなさいよ。それ」

「なぜですの」
「あの人は隣にきた女の子のお弁当をいつも食べる癖があるの。前、ここにいた中島さんという人も同じ目に会って、それが嫌で会社をやめたぐらいよ」
「まア」
フサ子はびっくりして、
「どうしてかしら」
「ケチなのよ。あの人は徹底してケチなのよ。ようく注意して見ててごらんなさい。あの人がお金を使うことは一度もないから」
ケチとハゲの男は昔から若い女性に好意をもたれた例がない。上田信子はこの時、顔をしかめて露骨に藤堂にたいする軽蔑の感情をあらわした。
翌日、フサ子が昼食の時間に自分の顔をまたしてもじっと見ている藤堂に、
「すみません。今日はお弁当あげませんわ。だってあたし、お腹がすくんですもの」
とはっきり宣言すると、
「そうか。それは君の自由です。ぼくは君の自由を束縛する意志はない」
と彼は残念そうに呟いた。
「ねえ。どうして昼食をたべないんですか」
「ぼくは二食主義者ですからね。元来、日本人は江戸時代のはじめまで二食の生活を送ってい

たんですよ。我々の祖先がそうだったのなら、別に三食たべる必然性はない。ぼくはそういう意味で祖先の生活を尊重しているんです」

「へえ」馬鹿馬鹿しいと思いながらフサ子は藤堂をからかった。

「その二食主義者が、どうして私のお弁当を食べる時は三食主義になるんですか。本当は藤堂さん、ケチなんじゃないのですか」

「はっきり、ものを言うなあ」

藤堂はケチと言われても別に怒りもせずニヤニヤとして、

「正直いうとぼくは二食主義者じゃない。ケチに徹している男です。だから無駄な飯代は使わんようにしているのだ」

「そんなにケチをして、面白いんですか」

「貯金しているんです。いつまでも人に使われていたくないからね。やがて自分で会社を作ろうと思って、その資金をためているんです」

「もう随分、溜りましたか」

「もう百五十万円ためました。入社一年と一寸(ちょっと)で」

「百五十万円！」

入社して一年と一寸で百五十万円溜めた。その藤堂の言葉はフサ子を真実びっくりさせた。自分とそう年齢もちがわぬこの青年が毎月の月給のなかからどの位、貯金しているのか知らな

いが百五十万円とは驚きだった。彼女は相手がホラを吹いているのではないかとマジマジとその四角いホームベースのような顔をみたが、相手は真面目に大きくうなずいている。

「どうして、そんなに溜めたんです」

すると藤堂は一寸だまっていたが急に、

「君も溜めてみたいのですか」

とたずねた。

「ええ。もし、できたら溜めたいですね。溜めるのは女の特性ですもの」

「それでは失礼なことを聞きますが……かまいませんか」

「かまいませんわ」

「君は便秘症ですか」

思いがけぬ不躾な質問にフサ子は仰天したが、顔を赤らめて、

「ええ」

と蚊のなくような声で答えると藤堂は我意を得たりとばかりに、

「それはいい。それなら君は見込みがあります。フロイドという独逸の有名な精神分析学者の説によると、ケチな人ほど便秘症なんです。ケチな人はその本能から自分の体内にあるウンコまで外に出したがらないからですね。前、その席にいた人はそういう意味で落第でしたよ。君はその点便秘症だから有望です。あるいは一年で百万円、貯金できるかも知れん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.